

シリーズ
成田市

50年

時代の変革期
(昭和43～45年)

新空港が三里塚に決定し、文字どおり日本の空の表玄関としてクローズアップされた成田市。空港建設が急ピッチで進められる中、昭和40年代半ばは、30年代から進めてきた種々の事業が着々と実を結び、成田が大きく変貌した時代でした。

またこの時期は、宗吾御一代記館・成田山新勝寺大本堂の落成、6年ぶりの成田祇園祭復活、成田商工まつりの開催、北総の拠点市場となる成田市公設市場の建設、第28回国民体育大会の準備など、市域全体が活気に満ちあふれ、大変な盛り上がりを見せました。

北総地域の核として、躍進する成田



甚兵衛大橋の開通式(昭和43年1月29日)

長豊橋・甚兵衛大橋の開通
国鉄の電化
そして国道51号線の舗装化

昭和43年1月、印旛村吉高と北須賀を結ぶ甚兵衛大橋が、2月には茨城県河内村(現河内町)と竜台を結ぶ長豊橋が相次いで開通しました。

両橋の完成は、これまで渡し船もしくは数十kmも回り道をしてきた成田市と周辺市町村との距離を



完成した長豊橋。これにより成田 江戸崎線が完通(昭和43年2月)

一挙に短縮し、経済・文化交流などが飛躍的に発展しました。

3月には、電化促進を呼び掛けて10年目、待望の国鉄現「JR」千葉～成田間の電化が実現し、同4年5月には、国道51号線の佐倉、佐原間が、6年の歳月と32億円の巨費を投じ舗装化されました。

これまで遅れがちであった成田市の道路交通網の整備や、輸送力アップをもたらした電化によって、京葉臨海工業地帯と鹿島臨海工業



千葉駅での電化完成祝賀電車出発式(昭和43年3月26日)

地帯の中間に位置する北総地域の発展に大きな期待が寄せられました。

一方、それまで住民の足として利用された竜台の渡し「印旛沼の渡し」、数々のファンやエピソードを生んだ蒸気機関車が、成田から姿を消したのもこの時代のことです。



国道51号線舗装完成祝賀開通式(昭和44年5月7日)

姿を現した新空港

4,000m滑走路、旅客ターミナルビルなどの諸施設の完成を目指し、急ピッチで進められた新空港建設の第1期工事。その建設に必要な大量の資材を運ぶため、昭和44年4月、国鉄成田駅から土屋地先まで(約3km)の資材輸送専用線と約11haの水田を埋め立てる資材置場の造成工事が着工、1年後に完成しました。



4,000m滑走路の輪郭が現れる(昭和45年)

土屋地先に完成した資材輸送専用線(昭和45年4月)



鉄道輸送による資材は、関東一円から運ばれる砕石、千葉港を経由する砂、砂利、セメントなどで、年間約200万トンにも及びました。そして、資材置場から三里塚まではダンプで輸送されました。空港内工事の最盛期には、1日平均延べ7,600台のダンプが入りし、280台のブルドーザーやショベルカーが稼働、よっやくその全容を現し始めました。

下総御料牧場の閉場

日本の牧畜業の先駆的な役割を果たした下総御料牧場。空港建設に伴い栃木県高根沢に移転することになったのが昭和44年の8月のことです。

この年の4月1日から15日まで行われた最後の桜まつりは、牧場に別れを惜しむ花見客で連日にぎわいました。

新牧場へは、80家族約300人と家畜約400頭が移転。8月11日には、三里塚小学校と遠山中学校で転校する子どもたちのお別れ会が、18日には牧場内の総駿会館で閉場式が行われました。

明治8年、下総牧羊場として発足以来、一世紀余りの歴史に幕が降ろされました。



下総御料牧場閉場式(昭和44年8月18日)

三里塚を語る

四季折々の美しさが忘れられない



新島新吾さん
(大清水)

御料牧場で育ち、就職を定年退職後、三里塚御料牧場記念館で案内役を務めた新島さんにお話をうかがいました。

「牧場には、いくつもの顔があります。第一に明治・大正・昭和の三代にわたり天皇家の食材を提供した牧場、第二に獣医学の発祥地、第三に名馬の里です。そして何よりも忘れられないことは、人々に親しまれ、豊かで美しい自然でした。」

春は一目五千本とつたわれた桜が、夏には牧場内や軽便鉄道跡地など一面にアラゲハンゴン草の黄色の花が咲き誇りました。花の名前を知らず、牧場花・鉄道花などと呼んでいました。秋は紅葉、冬はまるでじゅうたんを敷きつめたような赤や黄金色の落葉。四季折々の風景には、風情があり美しかったです。

また、こんな見方もできます。江戸時代には佐倉七牧の一つ取香牧が、明治時代には国営の下総牧羊場・取香種畜場が開設、昭和は終戦後の大開墾と入植、そして新空港の建設。こうして見ると三里塚は、日本の近代化の大きな波の中にいたんだなとつくづく感じます。

空港ができ、町並みも暮らしも随分変わりました。当時は寂しさもありましたが、今は場所が違っても御料牧場が残っているというだけで本当にうれしいです。そして多くの人にこれまでの三里塚の歩みを伝え残せたらと考えています。」



三里塚ではほとんど見られなくなったアラゲハンゴン草